

第8回鳥栖市総合教育会議 議事録

会 議 名	第8回鳥栖市総合教育会議
日 時	平成30年5月9日(水) 開会 午後 1時10分 閉会 午後 2時43分
会 場	市役所3階第1委員会室
公 開 ・ 非 公 開	公開
出 席 者	構成員：橋本市長、天野教育長、古澤教育委員、吉原教育委員、戸田教育委員、副田教育委員 事務局：江寄教育総務課長、眞子教育総務課総務係長 説明員：平川学校教育課長、山津生涯学習課長兼図書館長 中島学校教育課参事兼課長補佐兼指導主事、 古賀学校教育課参事兼教育相談係長兼指導主事 立石学校教育課課長補佐兼学校教育係長 栗山生涯学習課図書係長、有馬生涯学習課図書係主査
傍 聴	1人
協 議 事 項	◆金銭教育について ◆「特別の教科 道徳」の推進について ◆子どもの読書活動の推進について
発 言 者	内 容
橋本市長	<p>はい。皆さんこんにちは。総合教育会議、本年度初めての会合ということでお集まりいただきまして、ありがとうございます。早速、議論を始めたいと思いますが、今日は3つ、「金銭教育について」、「特別の教科 道徳の推進について」、そして、「子どもの読書活動の推進について」と3つでございます。</p> <p>「金銭教育について」ということは、今の状況を把握をした上で、今後どんなことを考えていくべきなのかなということで、御意見を伺いたいということで、提案させていただいたものでございます。認識としましてはやはり、1つは、子供たちが携帯端末を結構持っていて、そこでSNSを介した、さまざまなトラブル、金銭トラブルも含め、巻き込まれる可能性が非常に高まっているということ。それから、もっと今度は、先のことを考えると、やはり、起業化精神というか、そのお金をどう活用していくのか、あるいは、社会の血液としてのお金の役割とかそこら辺まで考えておくと、やはり随分自立心の高い子供ができてくるのではないかという思いがあって、さまざまな多分、観点があると思いますので、そこで、御意見を賜ればなという思いで提案をしたものです。</p> <p>私たち、私たちといっても、私が小さいころは、お金は不浄なも</p>

	<p>のみたいなことで、子供は月々のお小遣い銭さえもらってその中でやりくりするだけでいいんだと、余計なことは考えるなみたいなことで育ってきておまして、それであんまり稼げないのかっていうのはありますが、やっぱりですね、諸外国を見ているとやっぱり、小さいころから、お金の管理を自分でさせる教育を家庭でもやりますし、もうやっぱり小学生ぐらいで自分の貯金とか、それを使った活用とかいうことをやらせていますよね。そこがやっぱりその自立心という意味でもお金の管理の仕方とか活用の仕方とか、どういう考え方でお金とつき合うべきなのかということをやっておくって意味っていうのはあるんだろうなというふうに思っておまして、身近なところではそういうその金銭トラブルに巻き込まれてあるんですけども、そこから踏み出していくことも、可能性としてあるのかなという気がしておまして提案をした次第です。だからそういうことでちょっとこちらから、それぞれにどうなんでしょうということではないんですが、何か、この金銭教育という、ことで思い浮かべられること、あるいは課題の認識とか、そこら辺をお聞かせいただければありがたいなと思っております。</p> <p>だから多分6人が6人全部ね、イメージ違うと思うんですね金銭教育って聞いたときに。そこからいきましょか。はい。2時20分ごろ1人、お帰りにならなければいけないと聞いておりますので、スピーディーに進めてまいりたいと思いますので、もうここは今日はここまでで、その次のところまでに考えを深めていただいてということも結構でございますので、ここはネタ振りということで、一言ずつさらっといただいて次にいっても結構ですから、よろしくお願いします。</p>
天野教育長	<p>金銭教育ということですね、この中で私たちが思うのは、私はやっぱりこう、こういう金銭教育についてという思いがあったので、自分がすぐ思うのは、やっぱり立場的にもといたしますか、学校の教員でしたので、学校でどのように指導してるかっていうところがすぐ頭に浮かびます。そういう意味で、ちょっと今回ですね、学校ではどういう状況で金銭教育をとらえているのかという資料渡してたというようなことで、これは中島参事のほうがですね、調べてくれまして、私も現場にいたときには物の大切さであるとか、そういったことを、学習する内容以外のところ全ての面で、道徳も含めて社会含めて家庭でも家庭科ということも含めて、いろんな面で指導してきたわけですけども、ちょっとその辺ところ少し調べてますので、じゃ中島先生。</p>
中島学校教育課参事	(資料に基づき説明)

橋本市長	<p>はい、ありがとうございます。今、取り組んでいただいている中身を説明いただきましたけども、それも踏まえて御意見があれば、先ほど申し上げたように、今回は、まずは御認識をいただいて、次までにやっぱりこうあるべきじゃないかということで承ってもいいのかなというふうに思っておりますので、あんまりここで絞り出さなきゃいけないということではなくて、感想でも結構ですのでよろしくをお願いします。</p>
吉原教育委員	<p>はい、金銭教育という言葉には、かなり難しい教育内容のように聞こえます。小学校1年生から中学校3年生まで、段階的に一貫して教えていかないと、この金銭教育はいけないと思います。</p> <p>また、基本となるお金がなぜこの社会に生まれ必要なのか、初期の段階で知識として持って段階に応じて勉強する必要があると思います。自分が低学年の時のことを思い起こせば、お金が大切だということは、当然分かっていたのですが、その大切なお金をどうやって得ているのかは、成長と同時に順を追って学んできました。お金を得ることも大切な教育として根本にあると思います。</p> <p>成長の段階に応じた金銭教育が一番必要だと思います。以上です。</p>
副田教育委員	<p>はい。例えば、クリスマス、そしてお正月と子供にとってのお金の感覚が緩む時期というのが、年末年始と続くと思うんですけども、私事で恐縮ですが、このお年玉を見てましたらこんなにもたくさんもらうのかと。親が私が貯金してあげるといって、自分のものにするからだめだと自分の貯金通帳に入れるというんですけども、結構好きな物買ってます。こんなに高額な物をと。1年の内で毎月それが続くわけではないので、こういうふうなお楽しみが続いてもいいのかなとも思いながら、でも、やはり昔とは違う、時代が違うと言われても、私が幼かった頃の金銭感覚とは違いますし、私が子育てしたときの子供に対する金銭感覚とは違います。最近、テレビを見ておりましたら、そのゲーム名はよくわからないんですが、段ボールで何かを作ってゲームをするという、その作る工程がとても楽しいので人気だということを、テレビで拝見しました。そうしましたらやっぱり子供たちも工夫して何か、それが高価だから欲しいというのではなくて、ただゲームでありながら、無いから工夫が生まれる。そこから自分で作ってそれで遊ぶという、それとゲームが一体化したものをこんなにも現代の子供たちも喜ぶんだと、それを見ながらゲームではあるんですけども、うれしく感じました。ですから、そのところでやはりその金銭感覚の金銭教育ではありますけれども、その根底にあるものはやはり無いから工夫が</p>

	<p>生まれる。何でもかんでもお金で処理しようではなくて、そういった教育を学校でもこれがあつたらとても便利なんだよ。でも、これが無いから他の物で今自分で手に入る物、身の回りにある物を工夫して代用できる物は何かできないかなというふうに、それがもしかしたら、工作に結びつくかもしれませんし、そういったところからの金銭教育につながっていくのではないかと思います。特に低学年からそのような取り組みが必要かと思っております。以上です。</p>
戸田教育委員	<p>冒頭、市長がおっしゃられたとおり、こういった金銭教育、経済教育っていうのが、幾つかの国、日本以外に幾つかの国では、家庭教育において、そして学校教育においても、結構積極的に取り組まれているんだと話聞いております。ですので、もっと日本において、こういったものが必要で、うまく充実できればいいなと思うのは、僕自身経済学部におりますんで、その立場からも必要性重要性っていうのは考えます。しかしながら、そのもう一方で必要なんだけど、今、学校では〇〇教育っていうのがいろんなものが入ってきて、本当にそれ学校の先生たちの負担にならないのかっていう、やっぱりいつもそれが心配になってしまう。で、どうするか、どうすればいいのかなっていうので、恐らくあり得るのは、外の力、外部の方々の協力を得て、ゲストスピーカー等の協力を得て、体験的な学習を1つのツールとしてやっていくというふうに考えることかなっていうふうに思いました。それに絡めて、事前にいただいた資料で、子供だけではなくて大人たちが、こういったことを知識をもう少し身につければいいんじゃないかっていう必要性があるということですので、広く大人にとってなかなか難しいですけども、そういった金融教育を親子で受けられるような親子ワークショップみたいなのをできれば、この親世代だけですけども、それはそういう機会になるのかなと。それは、今回資料見させていただいて、僕の子供のころはこんなの受けられなかったなと思ってですね、学校教育の中で受けた機会がなかったんで、そういった世代、我々の世代でも知る機会になるのかなというふうには思いました。すいません、まとまってないですけど。以上です。</p>
古澤教育委員	<p>それこそ金銭教育、特に金銭感覚っていうのを身につけさせるというのは非常に大事なことかな。この経済活動というのは、歳とるまで一生続くわけですから、やはり小さいうちから正しい知識なり行動なりを身に付けさせるのが、肝要かなと思います。また、吉原委員もおっしゃいましたけど、例えばお小遣いを例にとっても、何でお小遣いをもらえるのか。小遣いもらえるのは、親御さんがしっかり働いてるっていうことを分からせる必要が。当然みたく、毎月</p>

	<p>いついつになったらお小遣いくれるんでしょうとかじゃいけないから。そして、限りがある。一度もらって、一応自分のものになっても、その使い方には、非常に個人の性格が顕著に出てくると思ってます。自分の経験からしても、いつぐらいだったかは忘れましたが、お小遣い制になったときに、多分、私は早くに使ってしまったように思います。そういう失敗を失敗で終わらずに、ひよっとしたら終わってないかもしれませんが、そういうことから学ぶというのも、ありなのかなというふうに思ってます。同じ兄弟でも、きちっと自分で、兄なんかは堅実で、「おお、まだ持ってるね」っていう感じで思ったのを思い出しました。それこそ社会的な情報ツールの発達ですね、小学校のうちには自分でネットで買い物まではしないかなと思いますけど、中学生ぐらいになってくると、これいいねとかいうことで、友達同士とも話して、あの子があれ買ったなら自分も買おうとかいうことで、その中で、いろんな危険が待ち受けてる場合もございますので、そういう危機回避をするという意味からも正しく理解をさせて行動させるっていうのが大事なことかなというふうに考えます。</p>
橋本市長	<p>はい、それぞれ意見を頂戴しました。ありがとうございました。大変金銭教育が大事だという御認識は皆さんお持ちであって、それぞれの世代に合った教育を施していく必要があるということかなと思っております。後で、今の消費者の相談センターとかに聞くと、やっぱりさまざまなトラブルがあっておりますし、例えば、もう北欧だとキャッシュレスでキャッシュがもう2割ぐらいしか使われてない。8割はもうピッとするだけなんですね。だからいよいよお金っていうのは、感覚として持てなくなって、それこそビットコインの問題とかもあって、日々、すごい値動きですよ。そんな中で、じゃあどうするのっていうのは、我々でさえもついていけないような世の中になってますので、そこら辺の、吉原さんから貨幣の成り立ちとかっていう話もありましたが、やっぱり、お金っていうのは何で生まれてきたのか、それがどういう役割を果たすのか、多分仮想通貨なんてのはね、お金の究極の姿なのかもしれないし、そこら辺がやっぱり、あれは国境もね、何もぽんとまたいでしまいますので、為替も何も関係ないですかね。だから、そこら辺の時代も、もう足を踏み入れていますので、結構今までの感覚とは違うのかな。その意味では教科書というのはやっぱりすごく後追いなので、全然そこら辺フォローできないですよ。でも、イロハで起こっている。例えば皆さん携帯端末お持ちですけど、携帯端末をつくるためには量子力学とかのものでつくられてるんですけど、量子力学は習わな</p>

	<p>いんですね、実は高校までに。習うチャンスはないけれども、目の前で、具現化されたものが動いてるわけで、それを使ってるわけです。ですから、教育の体系そのものが時代にかなり遅れてきているっていうのは、1つ認識としてはあって、ただ、読み書きそろばんじゃありませんけど、やっぱり生育段階に合わせて、基礎的なものを教えなきゃいけない。そこに時代の最先端のところをどうそこに取り込んでいって、認識をさせていくかという工夫はやっぱり要るんだろうなというふうに思っていて、やっぱりここに来て、ものすごい変化が早くて、多分、子供の中でどうそこら辺のね、ギャップを埋めてんのかなっていうちょっと不思議なところは、自分でさえなかな埋めきれないところがありますので、そういうことがあって、ということでちょっとここは、こういういろんな視点があるということをお聞きいただき。はい。</p>
<p>天野教育長</p>	<p>今ちょっと学校教育の立場でのお話を中島参事にさせていただいたんですけども、私はやっぱり金銭教育のずっと過去こう見た時にですね、あんまり学校で教えてこなかったですね。金銭教育についてはですね。お金の価値とか、なぜ生まれてきたかとかそういったことについては、社会科の中で教えたこともあるんですけども。それで、私は学校でそこまで金銭教育を教えるべきなのかと。時代的なものが遅れているというはあるんですけども、5年生の家庭科なんかで、出納簿というかノートにつけようという学習をしますね、実際させるんですよ。そういうのをさせたというのを記憶してはいますが、そういうのはそこでもあるんですけども、やっぱりそれでもう終わっちゃうんですよ。それが広がりというか、発展性がなかなか生まれないというところがあります。そういうのを考えると、やっぱりこういっちゃなんだけど、やっぱり金銭教育あたりは、家庭でやるべきものであって、学校でばたばたばたカリキュラムを組んで、ここで教えます、中学校でこうして教えますのようなものではないというふうに思うんですけども、今の時代、教育力が落ちてますし、家庭の教育力が落ちてるといふふうに考えれば、金銭教育としてのポイントを押さえる必要があるというふうに思います。しかし、やっぱりさっきも出てたように例えば、がん教育はある、それから防災教育はある、ほんとに範ちゅうが広くて多い中ですね、どのようにしてまた、金銭教育まで教えるべきなのかなっていう気はします。しかし、やっぱりこう教えるべきなのは教えなきゃいけないでしょうし、ということを考えています。要はもう家庭でね、我々が昔、お父さんお母さんおじいちゃんおばあちゃんたちから習ったような形のそのものを大切にするとか、そうい</p>

	<p>ったところから、やっぱり指導していく必要があるだろうと思いませんし、なかなかそこを言っちゃあもう終わりだよって言われるかも分からないですけど、なかなか厳しいものがあるなというふうに思います。子供たちを見ていても、非常に使う金額が高額であったりとかね、いじめの問題にしてもたくさんの高額使うと。この前も1,000万円盗んだのを100万子どもが渡してたという記事が、そういうニュースがあってましたけど、やっぱりちょっと色んな面で問題あるんですけども、家庭教育、それからさっき出たように地域との連携、PTAのお願い、こういうところも含めて総合的にやっぱり金銭教育やっていくべきかなというふうに思ってます。以上です。</p>
橋本市長	<p>はい、ありがとうございます。その意味でやっぱり副田さんおっしゃたように、自分で考えるということがやっぱり基礎なんだろうな。考える力を育むっていうかですね、やっぱり物事を自分で考えて考えて考えて、というのがやっぱりこうね。あとその学ぶ術っていうか、知識を教えるではなくて、学ぶ術を教えていくみたいな、そこら辺がやっぱり基礎なんだろうなと。やっぱり教育長がおっしゃたように、かなり家庭によって教育力にかなりの格差が出てきますので、よりやっぱり二極分化というのが、進む傾向はやっぱり否めないと思っております。だからその意味では、上のほうは、ほっとけばいいんですけど、さっき言ったように、8割9割方、もう、キャッシュは扱わなくなったときに、金銭感覚というのをどこでどう身に付けるの？っていうのはやっぱり、あるんですよ。数字に丸1個増えるっていうのはどういうことなのか。現金だと札束っていうのがあって、何となくね、「おっ、この厚みか」みたいなのがあったんですけど、そういうのもないので、なかなかやっぱりその時代に合った感覚を導入する進め方がやっぱり、大きな課題かなというふうに認識してます。ちょっとここはもう、なかなか議論が発散してしまいますので、ここまでにいたしまして、次は、道徳の話、これはどなたか説明は？お願いいたします。</p>
天野教育長	<p>御存じのように今年度からですね、「特別の教科道徳」ということでスタートしました。ここに、学研のですね、教科書もすばらしい、この教科書ということで、昨年度、採択をやって、この学研の教科書にして、教科として行うということですので、評価も評定もありますし、いろんなことあるんですけども、今までの道徳とどこが違うのかっていうところも含めて、昨年度は教職員の研修会を、全鳥栖市の教職員集めての指導を行うとか、いろいろやってきたんですけども、じゃあ、新しく教科の道徳ってどのように変わったのか、実際どのように1カ月経って行われているのかっていうのかという</p>

	<p>とも含めて、ちょっと皆で共通理解を図って、今年は中学校の道徳の教科書を採択し、来年から中学校も始まるということも含めて、共通理解を図りたいという事を思って提案いたしました。以上です。</p>
橋本市長	<p>何か、この本の御説明かなんかいただくんですか？ お願いします。</p>
古賀学校教育課参事	<p>(資料に基づき説明)</p>
橋本市長	<p>説明をいただきましたけど、御質問とかございましたら。はい、教育長。付言がありましたら。</p>
天野教育長	<p>良かったり悪かったりだと一口で言うと、そういう気がするんですね。私もずっと道徳の教育をやってきましたんですけども、例えばこういうことがありますね。こう振り返ってみるとね。若いころなんか隣の学級なんかきちっと子どもは先生の言うことよく聞いて、きちっとした生活習慣もできている。きちっとやってるんですね。先生の言うことを支持するという事で。ずっといろいろベテランの先生に聞くと、どうして自分の学級とこの学級は違うのかなあって、いろんな学級経営とかいろいろあるんですけど、そういったときに、先輩の先生方から言われたのは、「この学級は、道徳の指導を確実に1時間毎週きちっとやっておられますよ」って言われたんですね。ガクってきましたね。私は何をしていたかというNHKのテレビを見せて感想を書かせるぐらい、感想を言わせるぐらいのそういうレベル。だからそういうレベルでいくと、そんなレベルの授業、道徳の授業しかしてなかったのかなあと。隣はきちっとやっぱり自分で教材を持ってきてその子供たちの心情をしっかり表せて行われたというところに違いがあったかな、それがいまだに忘れられんですね。道徳というのが、そんなにやっぱ大事だったんだなっていうのが思うし、それから私も一生懸命道徳について学びましたし、道徳のすばらしい先生の指導もビデオ何回も見て、同じように口で言って練習をしたりとかしながらやったんですけども、やっぱりこう、教科書となってくると、みんな同じことを教える。それがいいことではあるんですよ。要するに中学校なんかは道徳の時間が35時間というのが、できてなかった部分もあるだろうというふうに、平川課長おられますけど、中学校はどうだか知りませんが、きちっとやられたということもあるかわからないけど、以外とここにあったように軽んじられている状況もあったんですね。そうかと思えば、そうなれば、やっぱこれをする事によって非常にきちっと35時間、教科ですからやらないといけない。しかし、やっぱり、専門的に一生懸命やってきた先生方によると、自分でやって</p>

	<p>きたという、いろいろこう工夫してやってきた道徳の授業があるんですよね。これで画一化されて一つの形でやるとそこに物足りなさを感じるというようなところもあるんですね。道徳の授業が始まってまだ、1カ月ぐらいしか経ってないんですけども、多分現場では、若い先生方は道徳の教科書でしっかり教えることができているだろうというふうに思います。指導書がありますし。しかし、ベテランであったりとかいろいろ考えを持った先生方は物足りなさも感じてる。道徳のあり方も私だったら、何も言わないですと終わるようにして終わってました。例えば読み聞かせをして最後ちょっと話をして、しーんとなった段階でもう終わらすんですね。あと子どもっていろいろ考えるんですよ。しかし、今のところは書きなさいと、どんどん自分のことを振り返っているいろいろ書く、そのことが評点につながると。だからそういった意味でもいろいろな見方考え方があるんですけども、今度特別な教科となったときに、良いこと悪いこと、どちらがメリットになるかデメリットなのかなっていうのを考えながら、指導していかなくてはいけないというふうに思っています。ちょっと長くなりましたけど以上です。</p>
橋本市長	<p>ありがとうございます。いかがですか？平川先生。</p>
平川学校教育課長	<p>やればやるだけやりたくなるのが道徳でした。やればやるだけ、子供たちは中学生になると、先生が何を求めているのか分かるんですね、下手だからそういうふうな授業しかできなかったのかもしれないんですけど。ですから何を題材に持っていくのかですね。私の中では個人的ですが、この、考え議論する道徳ということが大きく言われておりますが、その昔であっても、「自分はこう思う。」「僕もそう思う。」とかですね、そういう発言が子どもたちから出るっていうのはやっぱりその、先ほど教育長も言われましたが、終わった後でも子供たちは「いや俺はこがん思った」とかいうことを言うような授業を、授業が終わった後そういうことだったらしめしめとってたところでした。ですから、いっぱい今いろんな課題が大人の社会にも子供の社会にもありますので、この教科書もそうですけれども、この教科書から発展してそういう話題を使ってですね、子供たちが、俺もこう思うというような授業を先生方にさせていただきたいなと思っているところでございます。以上です。</p>
橋本市長	<p>すいません、突然振りまして。今御指摘があって、多分そこら辺、多分皆さんもそういうふうにお感じなんだろうなと思って、やっぱり自分で考えさせるということだと思っんです。ですので、これこそ私は家庭の話だろうと思ってしまって、大きなお世話だと思っているんですね。だから、やっぱりそこは何て言うのかな、子供た</p>

	<p>ちがどういう志をもっていくのかっていうところにも関わってくるので、いやこれはこうなんですよっていう結論まで言われると考えなくなってしまいますね。多分だからそこは逆に怖いところがあって、「いや学校で習った通りにして何がおかしいの？」みたいなね、所が出てくるような気もちよっとしておりまして、特にですね、要は、日本の伝統的な価値感とかに基づく道徳ですよ、これ。実はその西欧的な常識によって生きてる人口って、多分世界の人口の半分以下しかいないわけで、全然違う常識で生きてる人たちが大半で、そこら辺と付き合っていかなきゃいけないときに、そこら辺の余裕というか、それを無くしてはいけません。全然違う常識で生きてる人たちって沢山いて、この常識当てはまらないよねっていう、全く根っこが違う考え方もあるわけですから、そこら辺がね、どう処理をできるんだろうなという、ちょっと心配にもなってくるんですね。だから、基本やっぱり相手がある話なので、相手とコミュニケーションをどう取って、そこを自分の中で消化をした上でどう返していったらいいか、結果的に平和にかつ協力をしながら良い社会を作っていく、そこにもっていくためにどうするかっていう、そのね、手続がちゃんといけるのかなっていう、ちょっと不安も感じつつ承ったところ、はい、戸田先生。</p>
戸田教育委員	<p>僕自身、今回の道徳の教科化はどちらかというと、さっき教育長は半々と言われてた、僕心配のほうが多くて、一番大きいのは、一つは評価があるということなんですけども、一番大きいのは、さっき市長が言われた、その多様性をどう認めていくのかっていうのが、これ、何ていうのかな、邪魔にならないかなと思ってですね。どちらかというと、こういうことしなきゃいけませんよっていうのを教える、あるべき何ですかね、道徳、括弧つきの正しい道徳的価値感みたいなのを教えるのが役割だと思いますので、もちろん必要なことはよく分かるんですけども、とはいえ、外国の方の問題もありますし、いろんな意味での、少数マイノリティのそれこそ先ほど、経済的な状況が違ったり、家庭的な環境が違ったり、性的なマイノリティの話があったり、そういう人たちの多様性を認め合っていきましょうよっていう方向性と、何ていうんすかね、うまく折り合うのかな。例えばそういった授業がありました、そういうテーマがありましたといった時に、そういう問題を抱えている子供さんが「議論しましょうよ」って言っても、なかなか議論できないかもしれない。それを先生方うまく授業進めていくのとても大変だと思いますし、だからこそ、それで評価しなきゃいけないとなるとやっぱり、話を戻しますけれども、あるべき正しい、何て言うかな、正しい道</p>

	<p>徳的価値感を前提としたような教科化っていうのは、多様なものを認めましょうよっていうのを、どう取り込んでいくのか、とても難しいんじゃないかなっていうのを心配しております。だから、教科書はできたけども、個別の先生方が授業していく上でそのクラス、その子供たちを前にして、工夫したり、気をつけたりしなきゃいけないことがたくさん出てくるんじゃないかなっていうふうに思いました。すいません。</p>
橋本市長	<p>ありがとうございます。私は7月号の市報に多文化共生の話を書こうと書いて、だから、多分日本の今の文化的社会的な教育状況とか、一定の基盤ができたところはこれは通じるのかもしれませんが、やっぱり文化の発展程度とか経済的な発展程度が違う人たちとつき合っていくときに、この常識が通じない世界も多分あるんですよね。だからそこら辺と折り合っていかなきゃいけない時代になっているところで、「これに基づくのは正しいんだよ」って言われると、「うん？」っていうところもちょっと無くはないんですけど。いかがですか。どなたか。</p>
副田教育委員	<p>道徳の本を、教科書全て読んだわけではないんですが、先ほど御紹介がございました、1年生の108ページと109ページのところでというお話があったかと思います。そこに目を通しましたときにこれは心理学だと思いました。心理学のABC理論というのがありますけれども、例えば、ここの事例とは変わりますが、例えば、男性がデートの約束をして女性と待ち合わせをしました。そうするとその女性はそのデートの現場に現れませんでした。1人の男性は自分との約束を破るとすごく怒る。2番目の男性は何かあったのではないかと心配する。3番目の男性は気にしないと平然としている。これは、でもほとんどの人が、怒っている人というのは、1番目の人は、「お前が自分のそのデートの約束をすっぽかしたから俺はそのことが原因で怒っているんだ」と怒る。でも結果がその怒らない人もいれば、平然としている人もいるという。Aということがあって、Cという結果が変わるということがああるわけですね。そのときに、Aという事態が問題なのではなくて、そのCの結果がそれぞれに変わったというのは、Bの受けとめ方が違うからCが変わったのだと。ですからそのコミュニケーション能力を上げたり、人の事を思いやったりするときに、Aの人はAの考え方だけしかなかったりするわけです。でもそのところで、ですからこれがちょうど三者三様でしたので、ABC理論だなと思ったわけですね。そうしますと、その先生の評価というのは、私もちょっと首をかしげるところがありました。それに対して、「だからこうしなきゃね」というの</p>

	<p>では、1つになってしまうと思うわけです。でも、そのきっかけとしてリフレーミングという言葉もありますけど、1つの物事は表裏一体で、根暗と言われている人は、マイナスで見ると根暗かもしれませんが、でもプラスで見ると物静かという、それはフレーミングに対してリフレーミングという言葉もありますけど、そのようなことを気づくきっかけにするには、良い題材ではないかなと思いました。そのときに自分で書いたり、自分の考えをまとめられない子供が、他の子が発言していたり、他の子が書いていることを見て、「なるほど。自分はこういうふうにしかなかったけれど、こんな考え方もあるんだ」と。ですから、そのBの視覚を広げるというところでは非常にいい教材だと思いました。ですから、ここでは道徳で、読み聞かせの話ではないですが、読み聞かせが活発で、朝読み聞かせのボランティアの方がいらっしゃいますが、読み聞かせをした後に必ず読み聞かせをなさった方は、「分かった？だから、この物語に書いてあったことはこんなことなのよ。だからこうしなきゃね。だからこうしちゃいけないよ。」ということは絶対つけ加えないようにと言っています。物語にはテーマがあって、十人十色の受けとめ方があって、それに気づく子もいるし、気づかない子もいる。だからそのところで、「はい、では今日の話はお終い。」で結ぶんです。でもこのことによって、必ず気づく子もいるんです。気づかない子もいますけれども。ですからそのところと見比べながら、教材としてはとてもいい教材だなと思いました。先ほども申し上げましたけど、そこでの評価というところで、それを先生が最後に意見をまとめて、だからこうこうこうだよねって言うふうになったり、そこに評価がつくというのはいかがなものかなと思いました。以上です。</p>
橋本市長	はい、ありがとうございます。どうぞ。
天野教育長	<p>今、副田委員さん言われてましたけどね、最後にね、評価としてまとめることはないんですよ。うん。だから、このABCあって、一番大事なのは、いろいろな多様な考え方を自分のこととして考える。「ああ何々ちゃんはこがん考えてる、ああ何々ちゃんは考えてる。こがん考えている。」それは自分とこのことについて考えて出てるんだね。それでいいですよ。だから、それをね、1つのまとめに持っていこうとは絶対にもちろんしないので、そこはいかがなものかじゃなくて、そういうふうにして、多面的な考え方を大事にしてるんです。だからみんなそれぞれに、30人おったら30人いろんな考え、そのようないろんな考え方をするとこが価値があるというとらえ方をさせていただいたらっていうに思いますけども。ち</p>

	よっつけ加えですけど。
橋本市長	はい、どうぞ。
古澤教育委員	<p>教育長が最初におっしゃった発言の中でちょっと意外だったのが、この道徳が始まったときに、基本的にこれ認可制じゃないので許可制じゃないので、担任の先生が教えられているんだろうと思ってるんですけど、その際、素人考えでは、担任の中でも、経験の浅い先生方、どれだけの割合で担任されてるかちょっと存じませんが、その方たちは、教えるのに自分の経験からして、戸惑いもあるんじゃないかなというふうに思ってたんですけど、発言では、そういう先生たちはしっかり教科指導書もあるし、やってるっていうふうな言い方されたので、おおっと思って、一つ懸念が飛んだかなと思ってました。っていうのが、私は佐賀県の教科用図書のこれの選定委員会委員をさせていただいたので、会合にも何回か出ましたけど、そういう中で、こういう基本的なベースの話は無しに、この教科書を選ぶっていう作業があったかなと。これ、段階を踏まえてですけど思ってたのは、じゃあ新規でこれを教えなきゃいけないとなったときには、えらいな負担感、負担があるんじゃないかなというふうに思ったんですよ。特に若い先生は。だからそういった意味では本当に先生方がそんな不安も無く指導されてるという実態があれば、1つ安心はしました。ただ、これからは、教え方にも、今評価のあり方でもこれだけ議論が出ているわけですから、私も評価っていうのは、どういうやり方でどこまでするのかというふうには思ってたんですけど、非常に難しい。考えようによっちゃ、そんな曖昧な終わらせ方するのじゃないけど、厳しく言えば、全部受けた子供に判断任せるとか考えさせるで終わりそうな気がしなくはないので、これから先、そういう先生方へのフォローもしていただけたらなというふうに思ってます。時代の趨勢なのかなと、この道徳の扱いがこれだけ教科化されるということはですね、やはり課題がいろいろあって、解消できない課題があったから、こういうふうになったんだなというふうに思ったところです。</p>
橋本市長	はいありがとうございます。吉原委員。
吉原教育委員	<p>はい、道徳教育全般として、他の人の気持ちや他の人の感じ方考え方がそれぞれに違いがあることを気づかせる内容の授業を、今までの先生方もやっておられると思います。今後道徳が教科になる以上、新しい道徳教科書も今まで以上に気づきを与える教科書として、有意義に使っていただければと思います。以上です。</p>
橋本市長	はい。

天野教育長	<p>ちょっと視点を変えてですね。6年生の「みんなの道徳」ちょっと見ていただいたらいいです。この124ページをちょっと見ていただいて、さっきこう見てたら、多分、歴史、昔の伝統的行事あたりのところも非常に大事、伝統的な文化というのを大事にしているということで、私はちょっとこう、選ぶときは全然頭になかったんですけど、選定の時なかったんですけど、今見てみると「あっ入ってるな」という。結局、大晦日の朝にということで、日本の伝統的な行事ですね。これこうあって、「和食との関係で和食の良いところはどなたとこだと思いますか、あなた身の回りで古くから。」ということで、この辺のところはもう御存じのように、教科「日本語」狙ってるのかなんですね。教科「日本語」でしたときに、他教科との関連というのは随分言って、去年一昨年ぐらいから、カリキュラムマネジメントする中で、時間的なものが難しいので、ということになると6年生で学ぶんですね。これは何年なのかというと5年生ぐらいで学ぶと思うです。低学年で学びます。そういう流れでやっていくので。そういった意味ではですね、教科「日本語」をこう。何かな、こういうわけでないんですけども、それといかにこの道徳等絡めるかっていうこともね、今後、大きいんですよ。これ見るとあと躰とかですね、礼儀とかいっぱいあります。入ってます。ということだから、そういった意味からいうとですね、教科として教える。教科「日本語」は教科ですから。そういった意味でね、非常に大事にしていきたいなあというのと、もう1つがやっぱりこの教科書教える時にですね、やっぱり1つは命といじめと情報教育との3つの絡みが強いんですよ。それで随分こう入ってきてますので、そういった意味でやっぱり今まで教えてなかった分、特に情報モラル関係はですね、教える場があんまりなかったですね。そういう中ではちょっと道徳あたりでその辺のところを教えて、教えるつちゅうか考えさせるっていうか、というのは一つの大きなポイントじゃないかなというふうにして期待もしています。はい。以上です。</p>
橋本市長	<p>はい、ありがとうございます。この件は、今年から始まって、今年度から始まった話ですので、1年間やっていった中でやっぱり振り返りというか、それをやっていく必要もあろうかと思えますんで、これはどこかであれですか、授業参観したりされるんですか。教育委員会として。</p>
天野教育長	<p>道徳の授業研究会みたいなのはやらないんですけども、各学校訪問12校ありますので、そういう中で道徳が必ず授業してもらおうようにしてますので、そういう中で見て評価をして指導していきたいというふうに思ってます。</p>

橋本市長	<p>はい、ありがとうございます。さまざまな視点から御指摘をいただきましてありがとうございます。今後続けていく中で、また皆さんからお知恵を拝借する場面もあろうかと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。じゃあちょっと、戸田先生がお帰りになりますので、次に急ぎますが、「子どもの読書活動の推進について」、ということで、はい。それで、最初に戸田先生ご意見いただいております。よろしくお願いいたします。</p>
天野教育長	<p>実はですね、鳥栖市の「子ども読書活動推進計画」ですね、これを今度生涯学習課の図書係のほうで作っていただいて、すばらしいのができて、パブコメをかけて、こういう形ででき上がったんですけども、そういう形でちょっと活字離れじゃないんですけども、それから大学の読書率の低さということで、読書時間0時間が53%かなんか載ってましたですね。厳しいなということで、やっぱり読書習慣の低下ということがやっぱり小学校中学校、特に中学高校あたりは厳しいという話も聞きますけど、そういった中で、せっかくこの「読書活動推進計画」をされたので、今後は、学校教育課もちろんなんですけれども、図書館においてもいろんな目線で、地域家庭も含めた上での読書活動推進あたりを進めて、今年度からですね、これこれは5年計画やったですかね。というところも含めてですね。やっぱりやっていかなくちゃいけないんじゃないかなというふうなことで、ちょっと今回出させていただきました。以上です。</p>
橋本市長	<p>はい、ありがとうございます。何か戸田先生、まず、いの一番に口火を切っていただきたいんですが。</p>
戸田教育委員	<p>緊張しますね。子供の読書習慣、うちの大学生を見てても、確かに読書離れは進んでいるなというふうには思います。公共図書館にできること、学校図書館でできること、いろいろあると思うんですけども、でもいろんな工夫されてると思うんですけども、先日子供を連れて、鳥栖市立図書館に行かしていただいてよかったなと思うことがありました。何かというと、娘を連れてですね、書棚の前で本を探してたんですね。3歳なんで何がいいか、聞いてもよくわからなかった。司書さんがすーっとやってきてくださって、「どんな本がいい?」「こんなの。」って言ったら本を選書して下さったんですね。これすばらしいなと思って。何かというと、司書さんっていう専門家が図書館にはいるんですけども、そんなに我々が使っていていいと思っていない。って使っていていい言い方悪いですけど、その専門知識を生かし切れてないんじゃないかなと思って。もっと、もっともっと前に出てきてもらえれば、もっともっと気軽にコミュニケーションとれるように、とっていいんだっていうことを</p>

	<p>我々が知ればですね、いいのになと思いました。で、いろいろ見ると、例えば、ブックラリーみたいなイベントがあって、この課題図書で10冊とか100冊とか読んで、借りて読んで最後司書さんに、これこれ読んだよっていう内容を説明して、司書さんから色々意見をもらって、判子もらうみたいなイベントやってるっていうのを見てですね、もっと司書さんとのコミュニケーションが楽しくなるような場が、図書館ができればいいんじゃないかなというふうに思いました。それは鳥栖市の学校図書館の司書さんも同じかなと。まさにその専門的な知識を実際に本を選んでもらったり、本棚を並べてもらったり、コーナー作ってもらったり、ずっとしてもらってるんですけども、もっともっと身近な存在になってもらえるんじゃないかな。すいません、僕自身がそんなに司書さんと仲よくなれてなかった。当然だと言われるかもしれないですけども、何かそういう方向がその読書体験のきっかけ、朗読本をすることの喜び、楽しさのきっかけをいろんな形で与えることが、何がどうつながるのか分からないので、司書さんの役割についてちょっと考えたことがありました。すいません、以上です。</p>
橋本市長	<p>ありがとうございます。何か図書館で司書さんが今こんな活動してますとか、あったらちょっと説明お願いします</p>
栗山生涯学習課図書係長	<p>まず鳥栖市立図書館御利用いただきましてありがとうございます。はい。今回、図書館のほうを中心にしまして「子どもの読書活動推進計画」を策定いたしました。やはり中高生、大学生、本を読まなくなるきっかけ、やはり子供のときにまず本に親しむ機会がないからではなかろうかということから、戸田委員のほうの子供さんを連れて図書館に来て、好きな本を選んでくださるといのは大変ありがたいことです。で、そのときに司書のほうに近寄って、「こういう本があるよ。」っていうような案内を差し上げたということですけども、これは図書館としても、小さいお子さんだけでなく高齢の方についても、何かちょっと探しものがあるのかなとか困ることがあるのかなっていう様子が見えるときには、声をかけてくださいと。優しくとにかく声をかけてくださいっていう案内をしておりますが、やはり、司書さんというのは、結構大人しめの方が多いものですから、自分から積極的に声をかけに行くっていう性格の方はなかなかいらないというのが実情でございます。で、今回、「子どもの読書活動推進計画」作成いたしましたけれども、もうこの計画を策定した理由は何よりもまず、どうやったらその読書離れ、活字離れっていうのを防ぐことができるかっていうことを主眼に考えております。そのためには、子</p>

	<p>供さんがいらっしゃるところに、とにかくどうやったら本があるのか。で、思わず子供さんが手にとりたくなるような仕組みづくりっていうのはどうすればいいのかっていうことを考えております。本市におきましても保育園であったり、学校図書館であったり、いろんな良い取り組みをされてる活動されてる団体たくさんいらっしゃいます。ただ、そこそこでの活動はされておりますけれども、いろんな団体とかが情報を共有して、連携して子供の読書離れを防ぐような取り組みは今のところできておりません。ですから今回、この計画の中で、まず、子供に関係するようないろんな関係機関、団体がまず情報の共有ができるような仕掛けを、そういう取り組みをしていきたいというふうに考えております。以上でございます。</p>
橋本市長	<p>その情報の共有というのは何の情報の共有ですか？</p>
栗山生涯学習課図書係長	<p>はい、子供さんに本を届けるっていうところで、県立図書館であったりとかが児童書の全点購入をされてたり、そういう本を公共図書館を通じて、保育園であったり、いろんなところに、寄附をしますよとか、団体貸し出しをしますよっていうような取り組みをされております。また、県とかの自治体以外にも、公益財団法人とかが本の寄贈であったりとかを、そういう取り組みをされているところもありますが、1つ1つのボランティア団体とかまでその情報が行き渡っていない。だから活用できない。寄附寄贈とかを受け入れていないような状況がございますので、そういう情報を図書館が中心となって各サークルとか団体におろしていきたいと、そのためのネットワークづくりをしたいというふうに考えております。</p> <p>以上でございます。</p>
橋本市長	<p>そこで司書はどういう役割を果たすんですか？</p>
栗山図書係長	<p>司書っていうのは、本の専門家です。ですから、こういう子供さんの年齢層が多い方には、こういう本がお薦めですと。例えば50冊選んでくれませんか。この保育園には10人のお子さんがいらっしゃいますって言ったときに、それこそもう、最近出たような本から昔から読み継がれているような本まで、その中からピックアップして本を選出することができますので、そういうところで力をお借りしたいというふうに考えております。以上でございます。</p>
橋本市長	<p>はい、ありがとうございます。私先日、テレビで見たんですが、本の達人、本屋の達人がいらっしゃって北海道の本屋さんなんですけど、その本屋さんにお手紙を送って、3万円か何か送ると、私はこういう悩みを抱えてますとかって書いてくと、その人が全部本を選んで、セットにして送ってくださるっていう本屋さんで、ものすごい活況を呈してるという話が出てましたけど、やっぱり数多出版</p>

	<p>されていて、何を讀んだらいいのかとあって、悩ましいんですよね。だからそういう意味では、司書の方も含め、「こういうことについてはこういう本があるんだよ。」とかね、例えば「こういうことで悩んでいる人はこんな本があるよ」とかね、そんな提案はホームページを通じて何かできないんですかね。ここで「こんな悩みがある人はこんな本が出てるよ。讀んだらどう？」とかね。あるいは、子育てで例えば何かの障害持ってるお子さんがいる方については、例えば「こんなね、本はいかがでしょう？」とかね。何かそんなこう、ケースバイケースではないけど、いろんなケースに応じて、本のサジェスチョンしてくれるようなサービスというのは、司書さんが、鳥栖のホームページ行くとね、こんな悩み持っていると。あ、こんな本があるんだということで讀んでくれたりとか、何かそんなきっかけを作ってくれる活動をしていただけると、随分先ほどの司書さんというのは、あるのかなあという気がする。だから、決してその本屋さんが扱ってらっしゃるのは、ベストセラーではないんですね。だからもう、その代わりその御主人は年がら年じゅう本を讀んで、勉強されてるんですけど、まあすごい努力だと思いますけど、そういうサービスができると、やっぱりみんな悩みはあるわけで、そこでやっぱり一番、手軽な携帯端末でもありますので、何かね、そんな活動につなげられると、あ、もうお時間いいですか？いいなと思いつながら聞いておりましたが、いかがでしょう。読み聞かせをしてくださっています。</p>
副田教育委員	<p>はい、今市長がおっしゃったこと、こういった問題を抱えているからこんな本っていうふうな、そんな選定があればいいなとおっしゃったのは、まさにブックトークだと思います。ですから、以前もこのお話には何回か触れたことがございますが、その司書の方たちが一つのテーマを決めて、今日は「友達」というテーマを決めたら、友達に由来する本を大体 30 分で 5、6 冊紹介するんですね、あらずじだったり。あるいは、今日は「強くなる事」とか、いろいろそのテーマを決めて紹介するという技法がございます。本も出ております。それが一番多分活発なのは、岡山県です。岡山県の司書の方たちは本を出していらっしゃいます。その技法がスピーチの仕方とよく似ています。一つのテーマを決めて、そのテーマに沿って、スピーチでしたら事例が入ってくるわけですがけれども、それが一つのテーマに沿って、本の紹介になるわけですね。そここのところから、友達関係で悩んでるからこれとか、何か友達と一緒に遊ぶには、じゃこの本がいいとか。ですから一つのテーマでありながら、こうとてもその括りが広いわけですね、それを発信したり、あるいは学校</p>

	<p>の図書館でも「さあ今日はブックトークの日」ということで、子供たちの前でテーマを決めて紹介したりということ、鳥栖市でも、活発にしていけば良いのではないかなというふうに今思いました。はい。</p>
橋本市長	<p>ありがとうございます。今すごく良い御提案をありがとうございます。今、学校の図書館の司書さんってどんなサービスやってるんですか。</p>
天野教育長	<p>おかげで、鳥栖市は随分前から、司書というのを市費で賄っていただいて、いやこれは本当随分昔からなんですよね。他の市町に比べて、随分早くから対応していただいているというのはありがたいんですけども、今言われたように、読み聞かせもやりますし、図書館全体の事務もやりますし、貸し出しの対応もしますし、啓発のための活動を行ったりとか、例えば、学年で読ませたい30冊の本を選んでするとか、もういろいろな対応をやっているのは事実ですね。それともう1つ大事なのが、今司書教諭というのが、そうですね、10年ぐらい前から入るようになりまして、各学校に1名、学級数にもあるんですけども、その司書教諭が中心になって、司書教諭と司書で学校教育の中での「読書活動」「読書学習」というのを行っている状況です。だから、司書補ってというのが今、こういう形で嘱託職員なんですけども、非常に鳥栖市の場合は、こういう形で入れていただいて、非常にいろんな面で活動しているのは、事実ですし、今後、またよろしくお願ひしたいというふうに思っています。以上です。</p>
橋本市長	<p>戸田先生、ちょっとお帰りになる前に、大学生を、私は採用試験で、大学を卒業しようかという人たちと相対することがあって、そこで語学力のなさを見て愕然として、それも一つ、日本語を始めるきっかけになったんですけども、やっぱり、読書しなくなった。あるいは、どういう状況だからしないんだと思われませんか？</p>
戸田教育委員	<p>どういふ。もうしなくなって入ってくるんで、どういふ状況でってなかなか難しいんですけども、彼らが、僕の部屋には本はずらっと並んでるんですけども、そんな彼らがいつ本を手にとろうとするかっていうと、何か例えば、地域で何か活動して行き詰まって、何か読書以外の現実世界で何か動き出して、で、じゃあ本読もうかってっていう時に出すんですけども、だから、現代っ子でも何かきっかけがあれば、読むことはするのかなと思います。ただ、圧倒的に数は少ないですけど。その教科書以外の本を読む機会を僕自身もうまく作らなきゃいけないなというふうには思っています。「これ読めよ」では、「みんなでこれを読めよ」ではなくてですね。なかなか、</p>

	苦勞している最中です。すいません。
橋本市長	<p>いやそれは、ある人に言わせればですね、今ネット社会なんで、「全部携帯端末でできるじゃん。」って、「調べもんなんか本なんか読まなくてできんだよ」という御指摘もあるんですね。ただ、多分試験問題とかで、みんなウィキペディアで調べて同じ間違いを書くとかね、あるし、多分自分の嗜好に沿った情報しか集めませんから、ものすごい偏った判断になりがちで、この前マスコミの記者さんと話をしていると、新聞読んでない子がほとんどですね。今高校生、私も鳥栖市内の高校の生徒会の皆さん全校歩いて話し、誰一人読んでないですよ、新聞。で、何で情報得るのって、もう友達から聞くとか、テレビとかがあればいいほうで、だから例えば、我々が新聞を読むというときにも、できる限り6つか7つかの新聞を読んで、全部立ち位置が違いますから、その論調を比較して、あとそれと別の情報を収集して、本当のところがどこなんだっていうことをやる癖がついてるんですけど、それはできないんですね。だから正しい情報を選ぶ術を知らない。という恐ろしさがあって、いやこれ人生間違えよねと思いながら話を聞いてるんですが、だからそこら辺が本を読まなくなったことによって、ものすごい何か情報収集源が狭くなってる気がしていいですね。だから本を読むということは、仮想体験でもあるわけですから、何かそこら辺がね、すごくこうトレーニングする場が狭まってきている気がしていい、日本危ういなと思ったりしてるんですが、いかがですか。</p>
吉原教育委員	<p>はい、子供の読書活動、対象は18歳以下ということで活動の計画書を作成していただきました。やはり、読書の基本にあるのは家読、小さなころから家庭でお母さんからお父さんから読んで聞かせることが、読書に興味を持たせる大切な基本になっているのではないかと思います。</p> <p>自分も子供のころ、母親より何回も読んでもらった本の記憶は、何十年経っても心に残っているものでたくさんあります。新しい道徳教科書にもなつかしい本の内容が載っていてうれしくなりました。読書活動の中で家読も重要な活動の基本にさせていただき、長年かけてずっと大事にしなければいけないものだと思います。</p>
橋本市長	やはりやっぱり家庭の役割大という。道徳もそうなんですが、今日は結構、家庭の教育力の問題になってくるので、古澤さんいかがですか。
古澤教育委員	私もこれ言おうと思ってましたけど、本当に、家庭での取り組みが大きいかなと思ってます。で、大きく、キャッチフレーズなんかつけてですね。どこの子供さんでも見ると、ゲームやってますよ

	<p>ね。テレビゲームを持ってあります。コンパクトなゲーム、その手に持ってるやつを、ゲーム機から図書に変えたりみたいなことで、何か変えたくなるような、すばらしい本を見つけ出して、PRしていくのも大事ななと思うし。まず、これ定例会の中でも私申し上げましたけど、親御さんが、多分、子供さんに読まないのは、親御さんも多分あまり図書と読書に触れてないのかなと。親御さんも何でもいいですので、楽しく本読んでも姿を見せれば、子供もそれ何っていうふうな感じで、親しみを持ってくるんじゃないかなと。全てが学校任せではですね、非常に、学校はますます働き方改革どころじゃなくなると思いますので、家庭へのアプローチもしっかりとやっていただけたらなというふうに思ってるところです。</p>
橋本市長	<p>ありがとうございます。「ハリーポッター」が流行ったじゃないですか。あのころは子供たちは読んだんですかね。御存じないですか。学校の先生、学校まで持ってきて読んでるかそういうのはなかったんですか。</p>
平川学校教育課長	<p>授業をしてるときにその話題に何かでなったときにですね、生徒がば一っと1人の子を見たことありました。私何だろうと思ったら「先生、その事は、彼女が一番詳しい。」というような話でですね、その子があんまり目立たなかつたんですが、何か自慢げに話して、みんながああということで、その子の存在感が上がったことはありました。だから好きな子は読んでたと思いますが、みんなが興味を持って子どもたちがざっと読んでたという状況があったかどうかは不明ですが、好きな子はのめり込んで読んでたなど。それは「ハリーポッター」だけじゃなくてですね、あるかと思いますが、最近、漫画から映画化されたり、小説から今流行のアイドルが映画にでたりというのはあって、逆に映画から入って本を読む子もいますしですね。そういう社会現象とかそういう流行、そういうところから、本に入るきっかけになってる子もいるのかもしれないなというふうには思いますね。</p>
天野教育長	<p>ここにですね、ちょっと課長の方に出してもらった。ちょっとコピーある？</p>
平川学校教育課長	<p>すいません。ここ3年間のですね、子供たちの図書館の本の貸し出し数です。記録が私の手元の資料で申しわけございませんが、小学校は大体100冊、年間ですね。一人100冊、60冊から100冊、多い子になると120、30冊というような、統計というかその数字は上がっています。中学校については、もう1人当たり、10冊から20冊ぐらいに落ちてるっていうのはあります。小学校の子供たちが借りてるから、全部読んでもかというところはまだ確認をしております。</p>

	<p>ませんけれども、それだけやっぱり図書館に通ってるということ。それから市立図書館のほうにたまに行くこともあるんですが、やっぱり、そういう小学生とか小さい子供たちは来て、よく本を読んでいるなっていう感じはします。中学校になると塾だ部活動だ、何だかんだということで、本から離れてるなっていうのは、現場の実態からも明らかですけども、その辺は中学校としては課題かなと思います。</p>
<p>天野教育長</p>	<p>ちよっとこの貸し出し数を見せていただいて、伸びてるなあということでちよっと安心はしたんですね。中学校はちよっと厳しい状況があるんで、それでも27年度からの3年間の推移はどこの学校でも伸びてますね。で、学校では読んでいるですよ、実は。しかしですね、私はこう見ていて思うのは、学校で読むんだけど、家では読まないんですね。なかなか、やっぱり家ではなぜ読まないかというやっぱり、いろいろやることが多くて、勉強もあるでしょうし、ゲームもあるでしょうし、いろいろ塾もあるでしょうし、社会体育もあるでしょうけれども、非常にだから、家では読まない子供たちを読ませるようにすることが、やっぱり大事だなというふうな感じもするんですね。そうなるやっぱりさっき吉原委員言われたようにやっぱり家読なんですよ。だから今家庭っていう事がでたんですけども、今回この中にもですね、大きくこの家庭における子供読書活動推進で家読の推進とかけていただいて、私もですね、現場いたときに、ノーテレビノーゲームデーというのはですね、学期に1回とかあるんですよ。地区PTAのほうがですね、計画をしてくれるんですね。これで何をやったか、それは家庭によるんですけども、やっぱりしっかり親子で読書タイムをとったと、親子触れ合いの時間をとった、読書した、料理をしたとかいろいろあるんですけども、その時間はやっぱり、家庭的にしっかりとこなんかは、本当にこの実践をしていただいた中で一番多かったのは、やっぱり家読だったですね。昨日ですね、PTA連合会の会長の古賀さん、ちよっと本年の計画で話し合ったんですが、そこでお願いしたのは、やっぱりこの「家読の推進をしてください」って言ったんですね。結局家庭で読む癖っていいですか、週に1回でもいいし、月1回でもいいし、学期に1、2回でもいいし、親子読書の時間をとってくださいねっていう話をしたんですけども、この辺がやっぱり私もかぎを握っているんじゃないかなというふうに思います。だから家庭によって、それはものすごく家庭によって違うんですけども、そういったことをやっぱり、PTAそれから地域、それから市立図書館、学校、そういったことで、みんなで連携しながらですね、広げてい</p>

	<p>きたいというふうなことがこの、特にこの読書活動推進計画の中で、家読の推進にかけていただいているので、数年前ですね、家読の県の大会を鳥栖市であったことがあったんですね。そんなときは、読み聞かせの方々もみんなこう連携して非常に良い活動できたんですけど、やっぱりそれが終わると、やっぱりこうすぼんでしまったみたいですね。だから、こういったことも含めて、やっぱり、やっていかななくてはいけないのかなと改めて思ったところでございました。以上です。</p>
橋本市長	<p>はい、ありがとうございます。結局、今日の課題は全部家の中のものでしたね。我が家でいくと、子供はゲームは、1日マックス30分、泣きわめこうが何しようが電源を抜くということをやりましたし、携帯端末は、高校卒業してから初めて持たせたという事。高校までは一切そういうものは持たせてないんですが、だから、どうなんだと。あんまり褒められたもんじゃないんですけど、そういうことで、ただやはり未だにやっぱ本は常に持ち歩いてますし、そこはやっぱり読む癖というのはついたのかなという気はいたします。それで、私も何か気になった本があると勝手に送りつけるんですよ、通販で買ってですね、もう、子供の住所にですね。読んどけということでやっていって、強制的に送りつけて、捨てるかどうか知りませんが、そういうこともやったりして、そういうね、繰り返したんだろうなというふうに思います。それぞれがやはり、今後ともね、考え続けなければいけませんし、やっぱり啓発、特にやっぱり司書さんが、やっぱりせっかくね、いろんな知識とかノウハウをお持ちなので活躍する場をですね。ぜひ図書館でもつくっていただいて、鳥栖の図書館のホームページいくと、さまざまなガイダンスが受けられるとかね、あるいはこれからね、高齢化で、目が、もう我々も、我々っていったらいかん。私もかなり厳しくなってますんでね、音声で聞ける本とかですね。もろもろ手だてがあらうかと思えますので、そこはぜひ知恵を絞っていただくのと、それぞれやっぱり役割を分担しながら、頑張っていければと思っております。</p> <p>そろそろ予定をしておりました時間でございますが、何か皆さんから、あるいは事務局のほうからございましたら。終わりますか？</p> <p>ただ、マスコミの記者さんとの話をちょっと追加で申し上げると、高校生、生徒会に属してる生徒会の役員さんですから、かなり頑張って自主的に活動しようとしてる皆さんが、誰1人新聞を読んでないというのに愕然としました。新聞記者さんたちの危機感というのは、要するに彼らがいろんな取材をしていろんな記事を書いてくれます。ただ読んでくれる人がいない。ということは部数が減っ</p>

ていく、仕事がなくなる可能性が高くなっていく。そうするといいよ大きな都市から発せられる情報しか伝わらなくなっていく。いかに地方で良い取り組みをしても、それが伝わりませんから、全然評価されなくなる。評価されないと、もうその活動そのものを誤ってしまう。ということで、地域の活動がどんどんどんどん低下していった都市型、もう拠点都市しか、多分、情報も発信されないし、結局人口の集中がより加速されんじやないかという危機感は非常に強く記者さんたちも持っている。例えば、いろんなどこに取材に行っても、昔は「それいつ書いてくれるんですか？」っていうので聞かれたけど、「いや出たらくださいね。」って言われて、買ってもくれないということですね、愕然とされておりましたが、そういう世の中ですね。だから、やはりたかが新聞なんです、やっぱりその新聞を読まなくなる。あるいはっていうことが、やっぱり地域からの情報発信、あるいは地域への関心もなくなってくることに繋がってくるという危機感をこの前しみじみ言われまして、だからそこは、これも情報発信と言いつつですね。結局誰も見てくれないっていうのは、難しいところにいるなと思っております、ネットで見るといいやという、ネットで見るといいのもネットぶりがいろいろあるので、やっぱり友達ネットワークの情報しか見ないとか、あるいは、特定の新聞のどこしか見ないとか。そうするとね、先ほど申し上げたように立ち位置が全部、新聞社も含め、違うわけですが、その違いがあるということさえ、認識できなくなって、ものすごく偏ったもので動いてしまう。ものすごく増え方が社会の増え方がひどくなっていく。というところに何か繋がっていくような気がしております、その客観的な視点を持つためには、やっぱり読書というのはですね、非常に有効だと思いますので、そこはまたいろいろ努めてまいりたいと思います。

他に、無いようでしたら、今日はこれで終了したいと思います。家庭教育が大事なことだけは確認ができます。どうも今日はありがとうございました。